

安西篤子

悲愁中宮



中宮

安西篤子

読売新聞社



悲愁中宮

定價 九八〇円

著者 安西篤子

編集人 谷亀利一

発行人 堀内 稔

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町八の一〇
北九州市小倉北区明和町一の一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 寿製本株式会社

第一刷 昭和五十三年十二月十八日

第八刷 昭和六十年十二月二十五日

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

ISBN4-643-72530-3 C0093

© 1978, Atsuko Anzai

悲愁中宮
目次

第一章 7

はじめに 9

出仕 11

噺り泣き 20

逢う瀬 29

第二章 39

懸想文 41

手引き 50

疑い 62

第三章 75

御遊び 77

姉妹対面 88

東三条院 102

第四章 111

暗い春 113

一夜 124

没落 134

第五章

二条殿焼亡 145

愚阻 155

蜘蛛手 164

第六章

あこ病む 179

姫宮誕生 189

赦免 201

第七章

心変わり 213

承香殿 223

彰子入内 233

第八章

一帝二后 249

誓い 259

御形見 270

装
丁
堀
文
子

悲
愁
中
宮

長
編
小
説

第一章

はじめに

中宮^{ていし}定子に仕える若い女房の左京が、局^{つぼね}へ下ってきたのは、正午を少しまわった時分だった。主人の朝の御手水^{みづ}や御化粧、それに午前十時ごろに召し上がる朝の御膳^{おもの}のお世話と、忙しく立ち働いたあと、宮仕えの女房たちの最も暇になるのが、この時間である。

今年十八歳になったばかりの左京は、女房の中では年少の方で、式部のおもとという中年の女房が、母の古い友だちであるところから、その局に預けられた形になっている。式部の局には、いま一人、小少将といって、左京と同年輩の若い女房も住んでいるのだが、いま戻ってみると、局の主の式部のおもとも、小少将も、どちらもまだ戻っていなかった。

ひっそりと静かな部屋に入って、三尺の几帳^{きちやう}のかげにうずくまった左京は、ちょうどよい折とばかり、傍の硯箱を引き寄せた。

どうしても書かねば済まぬ手紙を、書かないままに、もう十日余りが過ぎようとしていた。道長

はさぞ氣を苛っているにちがいない。

左京は墨をたつぷりと磨り、手筈から料紙をとり出した。書き出しの文言もんごんをあれこれと考えながら、筆をとり上げる。けれども、すぐに書きはじめようとはせず、手筈にもたれると、筆の柄を頬にあてたまま、庭先へ視線をさまよわせた。

正暦五年しやうりやく（九九四）の正月十日過ぎのこと、日差はようやく春めいてきている。二、三日前に降った雪はほとんどけ去って、日蔭になった軒先にわずかばかり、うす汚れた色を残しているに過ぎない。

この細殿の局の庭は、すぐ鼻先を塀にさえぎられて、狭い上になんの風情もない。しかし左京は、頬杖をついたまま、陽光のたわむれる庭先をいつまでも眺めやっていた。

近ごろ、道長宛に文を書こうとするとき、いつもこのように、筆が進まないのである。書き送らねばならぬことは、いくらもあるのに、さて、ではどの件から書こうかと考えるうちに、しだいに氣が重くなってくる。

以前は、こうではなかった。ずいぶんこまごました文を書き送って、道長を満足させたものである。

それが去年の秋の末ごろから変わってきた。

出 仕

左京が一条帝の中宮の定子のもとへ宮仕えに上るに至ったのも、もとはといえば、道長の差金によるものだった。

定子の父の関白道隆は、道長の兄に当る。しかし、この兄弟は仲が悪かった。定子が一条帝の後宮に入って中宮に立つと、道隆は弟を中宮大夫に任じたが、道長はこの人事を不服とし、まるっきし職務を遂行しようとしなかったほどである。

その道長が、左京を定子に仕えさせようと思いついたのは、もとより思惑があつてのことだった。もと、左京は道長の情人で、二人の間には女の子さえある。

道長が左京のもとへ通い初めたのは、いまから三年前、正暦二年（九九一）の春のことで、左京はようやく十五歳になったばかりだった。

当時、左京は三条町尻のささやかな家に母といっしょに暮らしていた。父は伊予の介まで勤めた男だったが、早く亡くなり、近ごろでは、暮し向きも楽ではなかった。たまたま、同居している母の妹のもとへ通っていた男が、関白兼家の家司で、ふと垣間見た左京の容姿を、兼家の御曹司道長に

洩らしたらしい。道長から幾度か恋文を送られたが、身分が違い過ぎるので、左京の家のものは本気にもせずにといたところ、ある夜ふいに、例の家司の手引で、男は左京の閨に忍び入った。

全く予期しないことではなかったが、まだ若い左京は、ひどくうろたえもし、恥ずかしくも思った。けれども、道長が叔母の夫の主筋に当る貴公子と知っていたし、そのしこなしのいかにももの馴れて優しくもあるところから、左京は強くもあらがわずに、その意に従ったのである。そのころ道長は、すでに鷹司殿^{たかみさき}倫子^{りんし}、高松殿^{たかまつ}明子^{めいし}と、二人の華やかな姫君を妻に持ち、倫子との間には彰子^{しょうし}と名づける娘さえ儲けていた。年齢は左京より十歳ほど上である。

道長は左京が気に入ったらしく、一時はかなり足繁く通ってきた。そして翌年の九月の末に、左京は道長の子を生んだ。

無事、身二つになったことを、左京の母から道長のもとへ知らせてやると、それから四、五日して月も変わってから、彼は三条の家へ現われた。

「軀の工合は、どうかね。もっと早く来たかったのだが、重い物忌みで、つつしんでいたものだから」いくらかばつ悪そうに云いわけをしながら、道長は嬰兒の顔をのぞきこんだ。

左京は、道長が知らせと同時に駆けつけて来なかったわけを知っていた。ちょうどそのころ、倫子と明子とが相次いで出産し、道長は、産養^{うぶやしな}いその他の儀式や祝宴に忙殺されていたのである。

それでも、左京のような境遇の女には、男を恨む心は起こらなかった。むしろ、忙しい中を無理に時間をつくって来てくれたことに、感謝の念さえおぼえた。

「これは、愛らしい子だ。そなたに似て、髪も濃く美しい。末が楽しみなね」

道長の褒める言葉を、左京は素直な喜びを以て聴いた。

しかし、道長の関心は、ほどなく赤兒から離れたように見えた。

「実は、そなたに折り入って頼みがあるのだが」

道長は、いつになく少しあらたまつた様子で、こう切り出した。

「なんでございましょう。私に出来ますことなら、何事なりと致しますけれど」

まもなく清涼殿で行なわれると聞く臨時衆の席へ着て出る、晴の装束の仕立てでも頼まれるのかと、その程度のことを予想して左京は答えたが、相手は思いもよらぬ事柄を口にした。

「ほかでもない。そなたに中宮のもとへ出仕してほしいのだ」

「あの、関白殿の姫君の御もとへでございますか」

左京は、おどろいて問い返した。道長と道隆の不仲は、左京のような少女さえ、つとに聞き知っている。しかも、道長は当年五歳の自分の娘彰子を、ゆくゆくは一条帝のもとへ入内じゆだいさせようともくろんでいた。とすれば、定子は娘の敵手である。

「なぜ、私をあちらへ仕えさせようとなさるのでしょう。これが、鷹司殿の御腹の姫君に仕えよとおっしゃるなら、まだわかりますけれど」

「それそれ、ほかでもないその姫のために、頼みたいのだよ」

こう云われて、左京はようやく、おぼろげながら道長の意図を察した。

「それでは、私に、あちらの御様子をさぐれとおいつけになるのでしょうか」

「うむ。その通り。みかどと宮の御仲合なみらいについて、そなたの眼にし耳にしたところを、逐一、私に告げてほしい。まだそのほかに、そなたの力を借りねばならぬことが、あるかも知れぬ」

道長の真剣な眼の色に、若い左京はいくらか怯えた。

「そのような重いお役目、この私に勤まりましょうか。どなたか他に、ふさわしいお方がいらっしゃるでしょうに」

できれば辞退したかったが、道長は聞き入れなかった。

「いや、私もいろいろ考えたが、そなたはどうってつけの女は、めったにみつかるものではない。年のころも若過ぎず老い過ぎず、宮仕えに出るにはちょうどよい。姿・形なりも難がない。しかも、なにより都合がいいのは、そなたによい手蔓てづながあることだ。そら、いつであったか、そなたが話したではないか。そなたの母は高階家たかしなと遠い縁続きで、中宮の母の高内侍こうのないしが内裏に上っていたころ、その女房を勤めたことがあると。その縁に縋れば、この話、必ず成るにちがいない」

中宮定子の生母の貴子きしは、高階成忠の娘で、学者の家柄にふさわしく高い教養を持ち、若いころは掌侍しょうじとして宮仕えしていた。その後、道隆と結ばれて、定子をはじめ多くの子女を儲けた。たしかに左京はかつて、母がこの貴子に仕えていた話を、道長に洩らしたおぼえがある。

道長がここまで考えているのでは、無下に断るわけにもいくまいと思われた。

「では、年でも明けましたら、母からあちらへ話させましょう」